

## レビ記1章「聖なる者となる」

### 1A 「聖」であること

1B 呼び寄せられた主

2B いけにえによる道

### 2A 家畜からのもの 1-2

### 3A 全焼のいけにえ 3-17

1B 牛 3-9

1C 主による受け入れ 3-4

2C 切り分けた部分 5-9

2B 羊 10-13

3B 鳥 14-17

## 本文

レビ記 1 章を開いてください。私たちの平日の学びは、前回まで黙示録でした。次にレビ記を学びたいと思ったのは、黙示録と無関係ではありません。黙示録には、世の終わりにある、あらゆる惑わしに対して、聖なる神がキリストにあって現れています。どんなことが起こっても、ぶれることがない、揺るがされることがない信仰を保っているためには、いかに聖なる神に出会っているかにかかっているかであろうと思ったからです。世の惑わしにおいて、人間的な思いは、一切、許されません。もし、人間の目で正しいとみなされることを許していけば、悪魔の餌食になってしまいます。反キリスト、獣が、世の終わりに何を行うかは、もうご存知のはずです。「黙示 13:6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」この獣の国が滅ぼされ、キリストの御国が建てられ、その後、新天新地に、聖なるエルサレムが天から降りました。そこには、何一つ汚れのない、混じりけのないガラスのような純金に造られたものであり、水晶のようないのちの水が、御座から流れています。聖なる神の中に、私たちが住むようになります。

### 1A 「聖」であること

1 節に、「主はモーセを呼び、会見の天幕から彼にこう告げられた。」とあります。これは、そのまま出エジプト記の最後からの続きです。40 章 34-35 節を見てください、「34 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」モーセが、主に命じられたとおりの幕屋を建てました。そして、そこに栄光の雲が満ちました。彼が立ち入ることができないほどだったのですが、その栄光に満ちた幕屋から、主がモーセに呼びかけて、告げられているのがレビ記の中身で、少なくとも前半部分はそうになっています。

## 1B 呼び寄せられた主

モーセ五書全体がそうなのですが、レビ記がレビ記だけでなり立っているのではなく、実は全く一つの話になっています。出エジプト記も、初めは、ヤコブとその息子たちがエジプトに降って、ヤコブが死に、ヨセフも兄弟たちも死んだという言葉から始まっています。ですから、話の流れでレビ記を見ていく必要があります。ヘブル語の聖書では、レビ記はレビ記という書名ではなく、「そして主は呼び寄せた」というものです。ヘブル語で初めに出てくる言葉がそのまま題名になっています。

出エジプト記では、イスラエルの民をシナイ山において引き寄せられました。「出 19:5-6 今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」主ご自身にとっての祭司の王国になり、聖なる国民になると言われています。聖なる国民であり、主の前に出て行く祭司たちの王国になると宣言されています。そして、幕屋を造るように神は命じられ、そこに呼び寄せられているのがレビ記です。聖なる神が、イスラエルの民を呼び寄せておられるのです。そこで、レビ記においては、「聖なる者」ということが何度となく出てきます。聖なる民として生きることが、レビ記の主題になっています。「11:45 わたしは、あなたがたの神となるために、あなたがたをエジプトの地から導き出した【主】であるからだ。あなたがたは聖なる者とならなければならない。わたしが聖だからである。」

ですから、主がエジプトからイスラエルの子らを救われて、その救われた民が主の聖さにあずかっていくという流れがあります。キリストにあつて救われた私たちが、主なる神の聖なるお姿にあずかっていくということであり、聖く生きることによって救われるということではありません。もう既に神に近づけられた私たちが、キリストにあつて神に近づく時に選ぶ道が、聖い道です。

聖なる者というと、道徳的なもの、この人はきよい人というと、品行方正な人のように聞こえますね。けれども、聖書の語る、聖いというのは、そうした道徳的な要素はごく一部で、もっともっと大きな世界です。レビ記では、その世界をじっくりと見ていくことができます。

聖なることの初めに言えることは、「主の語られる世界の中に生きる」と言ってよいでしょう。レビ記は、幕屋において主がモーセに語られていることが、ほとんどを占めています。誰々がこうした、という記述が非常に少ないです。そういった箇所は、レビ記 10 章の始まりにあります。異なる火をアロンの子が主の前に献げたという、やっではないけないことです。つまり、主の語られることだけで満たされているところが、聖なることなのです。私たちに聖霊が臨まれる時に、私たちがああだこうだと言っていることは、とても少なくなります。主が成されていることが、はっきり分かるからです。主が強くご臨在されている時、私たちは言葉を失いますね。

## 2B いけにえによる道

そして、聖なる道というのは、いけにえの道とも言えます。レビ記の前半部分は、いけにえや、献げ物をする事についてずっと教えています。それから、周囲の異教の慣わしから離れることについて教えています。レビ記 1 章から 16 章までは、いけにえによって神の前に出ることが書かれていて、17 章以降で、他の汚れたものから離れて生きる、歩みについて書いてあります。ここから、いかに聖い生き方が、私たちが考える品行方正な生き方とは異なることがお分かりになるでしょう。

ちなみに、その 1 章から 16 章までをさらに細かく見ますと、10 章から 16 章までが、脱線しているように見えます。先ほど少し言及した、異なる火を祭司アロンの子が献げる事件があったからです。そこで、きよいことと汚れたことの区別をすることの重要性を、主が教えられます。そのことを教えた後で、16 章で、大祭司が年に一度、イスラエルの罪の宥めのために至聖所に入る、宥めの日、あるいは贖罪日についての教えがあります。

そして、いけにえの種類について、主に五つを教えています。全焼のいけにえがあります。次に穀物のささげ物です。それから、交わりのいけにえがあります。そして、罪のためのいけにえが出ています。それに関連して、代償のささげものが出てきます。これらのいけにえを献げなさい、というよりも、これらのいけにえを献げるときは、というように書かれていて、イスラエルの民にはすでに、いろいろ主に対して献げる習慣がすでに始まっていたことを伺わせます。

創世記の初め、アダムが罪を犯した後に、神が彼とエバに、皮の衣を着せました。そこにすでに、いけにえがあります。いけにえとは、つまり、自分で自分のことを救えないことに基づきます。自分で自分が救えないので、主が憐れみを示して、いけにえによって私たちを受け入れるようにしてください。それで、アベルが羊を全焼のいけにえで献げ、それを受け入れてくださいました。そしてノアの時代、洪水後にノアが全焼のいけにえを献げて、それを主が受け入れられて、もう二度と大水で滅ぼすことはすまいとお決めになりました。アブラハムがカナンのに着き、シェケムで全焼のいけにえを献げて、それで主は彼に現れて、彼の子孫によってこの地を与えるという約束をくださいました。私たちは、神の憐れみによって備えられたいけにえを通して、神に近づくことができます。ですから、私たちがしなければいけないのは、自分の行いを積むことではなく、むしろ、自分のあり方を主に明け渡すことです。この方に全てを明け渡して、信頼することです。そして主に、働いていただくことです。

すべてのいけにえがそうですが、特に土台となるのは全焼のいけにえであり、レビ記 1 章も、全焼のいけにえから始まります。パウロがローマ人への手紙 12 章で、こう言いました。「12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」パウロが、1 章から 11 章まで、ずっと神の憐れみを書いていました。そして、その憐れみに

応答して、あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい、と勧められているのです。レビ記 1 章は、すべてを火で焼く全焼のいけにえについて見ていきます。

## 2A 家畜からのもの 1-2

<sup>1</sup> 主はモーセを呼び、会見の天幕から彼にこう告げられた。<sup>2</sup>「イスラエルの子らに告げよ。あなたがたの中でだれかが主にささげ物を献げるときは、家畜の中から、牛か羊をそのささげ物として献げなければならない。

いけにえについて、主は、家畜から献げなさいと命じておられます。そして、牛か羊から献げなさいと言われていました。経済的状况によって、牛は賄えない人は羊にし、また羊も賄えない人は、家鳩にします。主は、私たちが持っているもののなかから献げなさいと命じておられます。ノルマを達成することではなく、今ある自分をそのまま神に明け渡すことだからです。

ところで牛一頭の値段がいくらであるか、ご存知でしょうか？和牛と外国産では随分値段が違います。小型車ぐらいの値段はします。高ければ百万円以上、安ければ十数万円で買えます。しかし、ここでは次の節に出てくる、傷のないものということで良質な牛ですから、百万円だと考えましょう。この対価は尋常なものではありません。

そして、牛や他の家畜は単に物価で測れるものではありません。それらは列記とした命ある存在であり、尊厳があるのです。しかも、いけにえが野の獣ではなく、あくまでも家畜であることに注目してください。そこには自分の犠牲が込められているのです。経済的にも、心情的にも「いのち」が込められている対象なのです。

そして主は、これ以上高価なものはないいけにえを備えられました。家畜の命ではなく、人間の命であり、いや、人間の命以上の存在で、ご自分の独り子の命を対価としてお支払いになりました。ヘブル 10 章 5-7 節にこう書いてあります。「5 ですからキリストは、この世界に来てこう言われました。「あなたは、いけにえやささげ物をお求めにならないで、わたしに、からだを備えてくださいました。6 全焼のささげ物や罪のきよめのささげ物をあなたは、お喜びにはなりません。7 そのとき、わたしは申しました。『今、わたしはここに来ております。巻物の書にわたしのことが書いてあります。神よ、あなたのみこころを行うために。』」ご自分の子を、私たちのために人と同じ肉体を持たせて、そしてその肉体において死ぬようにお定めになりました。

こうして、主ご自身が、神であるご自分のあり方を捨てて、人の姿を取られて、十字架の死に至るまで忠実に神に仕えられ、全焼のいけにえになりました。そこにある神の憐れみに対して、私たちは応答して、自らを全て明け渡すのです。

### 3A 全焼のいけにえ 3-17

#### 1B 牛 3-9

#### 1C 主による受け入れ 3-4

<sup>3</sup> そのささげ物が牛の全焼のささげ物である場合には、傷のない雄を献げなければならない。その人は自分が主の前に受け入れられるように、それを会見の天幕の入り口に連れて行き、<sup>4</sup> その全焼のささげ物の頭に手を置く。それがその人のための宥めとなり、彼は受け入れられる。

全焼のいけにえは、9 節に説明が出ていますが、「すべてを祭壇の上で焼く」ことに特徴があります。ゆえに「全焼のいけにえ」と呼ばれています。

「傷のない雄」でなければいけません。欠陥のあるもの、傷のついているものは捧げることはできません。なぜなら、主が受け入れられるものだからです。聖なる神が受け入れるいけにえは、完全なものでなければいけません。マラキ書には、祭司たちが欠陥や傷のあるいけにえを献げていることを、主が叱責しておられます。主にあっては、完全でなければならないのです。

それは、主ご自身が、完全ないけにえを備えられたからです。「I ペテ 1:18-19 ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」この、傷もない汚れもない子羊のような方によって贖われたので、私たちの礼拝も、「残り物を献げる」ようないいかげんなものにならないのですね。主にすべてを明け渡すことによって、すべてを明け渡してくださった方を見上げることができます。

そして、「主の前に受け入れられるように」とありますが、そういう訳し方もできますし、「自ら進んで」と訳すこともできます。喜んで、と訳すこともできるでしょう。2 章の穀物のささげ物もそうですし、3 章の交わりのいけにえも同じく自発的に献げるものです。4-5 章にある、罪のきよめのためのいけにえと、代償のささげ物については違います。それは、しなければいけないことです。つまり、聖めの始まりは、このような自発的な献身があります。誰かに強いられてでなく、この方に自分をささげたいと願うことから始まります。そのことによって、主との交わりが意味あるものとなります。

そして、天幕の入口に行き、そこで、「全焼のささげ物の頭に手を置く」とあります。それが、「その人のための宥め」となる、とあります。家畜が自分の代わる存在となった、ということです。身代わりになった、ということです。この牛の首に刀を入れて、血をほとばしり流がし出すのですが、実は自分自身が流さねばならぬ血だったのだ、という認識です。

ここでは、手を置くというよりも、「掴んで、押さえ込む」というほうが適切でしょう。牛の頭に手を押さえつけたのです。それは、第一に「転嫁」することの意味を持っていました。自分の罪がその



牛に移っていった、ということです。自分が両手を頭に置くことによって、その牛が罪ある者とみなされるのです。これは、究極の、完全ないけにえであられるキリストご自身が十字架の上でしてくださったことでした。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方であって神の義となるためです。」

そして第二に、「一体化」することであります。自分が手を牛の頭の上に置くことによって、この牛がこれからたどる定めは実は自分自身が定めなのだ、と認識することです。彼は手を置いて、その牛の喉を刀で刺し殺します。血がほとばしり出ます。動脈をあえて切るようにしているので、その量は尋常ではありません。バケツに勢いよく水道の水を入れていくように、祭司はほとばしり出る血を器の中に入れるのです。そして、その頭はすぐに切り取られますから、刀を入れるときは、ほとんど切り取るような形で深く差し込むのであろうと思われます。

これらがすべて、「自分が受けなければいけなかった神の裁きなのだ」と受け止めているのです。牛のいけにえと自分を一体化させているのです。そこで血を流し、切り取られ、焼かれる牛はまさに自分自身だったのです。同じようにイエス様があそこで鞭打たれ、ののしられ、釘打たれ、血をほとばしるように流されたのは、まさに私のためなのだとみなすのです。

#### 2C 切り分けた部分 5-9

<sup>5</sup> その若い牛は主の前で屠り、祭司であるアロンの子らがその血を携えて行って、会見の天幕の入り口にある祭壇の側面にその血を振りかける。

「主の前で」という言葉が繰り返してきます。イスラエル人は祭司の前に持ってくるのではなく、主の前に自分が立っていることを意識していました。私たちの信仰はすべて自分が主の前に行くことです。他の人は眼中にありません。もちろん共同体として私たちは、心を一つにして主をあがめますが、究極的にはたった独りで主の前に立つのです。

そして屠った後は、血の役割が非常に大きくなります。バケツの水のように、たっぷり血の入った器から、祭司は、祭壇の側面に投げつけるようにして注ぎます。一滴、二滴を指で祭壇に飛ばすのではないのです。

私たち日本人の清めについての考えは、神道的なものがありますね。禊を済ませる、という言葉のように、水によって清めれば大丈夫だ、という考えです。私も年越しの時に、幼い時は大掃除のお手伝いをしたり、大みそかの時はお風呂にしっかり入った覚えがあります。けれども、聖書は、罪に対して深刻に捉えています。単に体にまとわりついた穢れを水で洗い流すのではなく、私たちの存在そのものが罪によって歪められているとみなします。私が子供に聖書を教えていたときにしばしば、「石鹸で心の中に悪いものは洗ってきれいにすることはできるかな？」と尋ねました。

主は、アダムが罪を犯した時以来、血をとまなう犠牲を求めておられますね。それは、「罪は、死をもって償わなければならない」からです。エゼキエル書には、「罪を犯した魂は必ず死ぬ。(18:4 口語訳)」とあります。いのちを端的に表すものは「血」です。医学的にも血が運ぶ酸素がなければ、体内の細胞はたちまち死んでしまい、私たちは死にます。日本語でも、「血の滲むような努力」という言葉や「血税」という言葉があります。そして、レビ記にははっきりと、こうあります。「17:11 実に、肉のいのちは血の中にある。わたしは、祭壇の上であなたがたのたましいのために宥めを行うよう、これをあなたがたに与えた。いのちとして宥めを行うのは血である。」

血を注ぎかけるのは、まさに「命が注ぎだされた」ことを意味します。このような光景を目撃した本人は、「私の犯した罪は、この注ぎをもって洗い清められたのだ。」と、良心の咎めからの癒しと解放が与えられるのです。「ヘブル 9:22 律法によれば、ほとんどすべてのものは血によってきよめられます。血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。」

さらに新約聖書では、そのいけにえでは罪を覆うことすれ、取り除くことはない。しかし、神ご自身である御子が人となられた、その肉体は、その血が私たちの良心の痛みを根こそぎ取り除いてくださることを教えています。そのことによって、私たちは聖められ、主イエスに従うことができるようになります。「I ペテ 1:2 父なる神の予知のままに、御霊による聖別によって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人たちへ。恵みと平安が、あなたがたにますます豊かに与えられますように。」

<sup>6</sup> また、全焼のささげ物はその皮を剥ぎ、各部に切り分ける。<sup>7</sup> 祭司であるアロンの子らは祭壇の上に火を置き、その火の上に薪を整える。<sup>8</sup> 祭司であるアロンの子らは、その切り分けた各部と、頭と脂肪を祭壇の火の上の薪の上に整える。<sup>9</sup> 内臓と足は水で洗う。祭司はこれらすべてを祭壇の上で焼いて煙にする。これは全焼のささげ物、主への食物のささげ物、芳ばしい香りである。

屠ったいけにえは、まず祭司らがその皮を剥ぎます。そして、いけにえを部分に切り分けます。かつてアブラハムもいけにえを切り分けたのを思い出せますか？ 彼はいけにえを真っ二つに切り分けましたが、その間を主が通られて契約を結ばれました(創世 15 章)。切り分けるのは、契約を結ぶことの象徴です。契約を破ったならば、このようになるということです。主が、このいけにえによって、私たちに対する契約をしっかりと履行してください。

そして祭壇の上に薪をくべて、その上でいけにえを置きます。肢体は切り分けられています。頭、足は切り分けられ、内臓と足は汚れているので水で洗ってからその上に載せます。ここが全焼のいけにえの特徴です。他のいけにえは、脂肪の部分だけだとか、一部なのですが、全焼のいけにえはすべてです。こうして、あらゆる体の部分が主に献げられている姿を表しています。つまり、私たちは、最も大切な頭の部分も、主の思いで満たされます。足は自分が行くべきところはすべて主

に献げられていることを表します。そして内臓は、心のうちにあるはかりごとであり、思いの深い部分ですが、すべて主に献げられていることを表しています。

そして最後に、これが「芳ばしい香り」として主に受け入れられます。これは主にとって食物であるとあるように、バーベキューのいい匂いと同じ感覚です。主が快く受け入れられたことを表しています。キリストご自身が、主の前で香ばしいかおりを放っておられました。「エペ 5:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。」主にとって、私たちがキリストにあって全てを明け渡している姿は、このように芳ばしい香りなのです。何か、見た目よくキリスト者らしくふるまうのではなく、不格好でも、すべてを献げ切っている人の姿が、主によって喜ばしいのです。

### 2B 羊 10-13

<sup>10</sup> そのささげ物が、羊の群れ、すなわち羊またはやぎの中からの全焼のささげ物である場合には、傷のない雄を献げなければならない。<sup>11</sup> それを祭壇の北側で、主の前で屠り、祭司であるアロンの子らが、その血を祭壇の側面に振りかける。

羊の場合と牛との違いは、祭壇の北側で屠るということですね。牛は天幕の入口なので、祭壇の東側だったのでしょうか、そこで屠られました。けれども、羊は北側で屠ります。いずれにしても、主の前で屠っていることには変わりません。

<sup>12</sup> また、そのささげ物は各部に切り分ける。祭司はこれを頭と脂肪とともに祭壇の火の上の薪の上に整える。<sup>13</sup> 内臓と足は水で洗う。祭司はこれらすべてを献げ、祭壇の上で焼いて煙にする。これは全焼のささげ物であり、主への食物のささげ物、芳ばしい香りである。

羊ややぎは、牛よりも安価な家畜です。けれども、大事なのは自分の家畜の中から捧げることです。ここでは 10 節、「羊の群れ」と強調しています。自分たちの飼っている家畜ということです。私自身に関わることでなければ、ささげ物がいっさい意味のないことになってしまいます。ダビデが神殿の敷地になるエルサレムの土地の区画、そして全焼のいけにえをアウラナというエブス人から買い取りましたが、初めアウラナは、すべて差し上げます、と言いました。けれどもダビデはこう言いました。「Ⅱサム 24:24 いや、私は代金を払って、あなたから買いたい。費用もかけずに、私の神、【主】に全焼のささげ物を献げたくはない。」ダビデがこのように積極的に関わったように、私たち自身が、積極的に礼拝に関わるのです。

### 3B 鳥 14-17

<sup>14</sup> 主へのささげ物が鳥の全焼のささげ物である場合には、山鳩、または家鳩のひなの中から、自分のささげ物を献げなければならない。<sup>15</sup> 祭司はそれを祭壇に持って来て、その頭をひねり、祭壇



の上で焼いて煙にする。その血は祭壇の側面に絞り出す。<sup>16</sup> 餌袋はその中身とともに取り除き、祭壇の東側の灰置き場に投げ捨てる。<sup>17</sup> その翼は引き裂くが、切り離してはならない。祭司はそれを祭壇の上、火の上の薪の上で焼いて煙にする。これは全焼のささげ物であり、主への食物のささげ物、芳ばしい香りである。

牛も羊も献げる経済的余裕のない貧しい人は、鳩を捧げることができます。主はそれぞれ人々を召されたところで、ご自分に仕えることができるようにしてくださっています。これは逆に、「私は今、これこれの状態であるから、まだ主に献げることはできません。」という言い訳をいうことはできないということです。主は、今あるもので自分を捧げなさいと呼びかけておられます。”Come just as you are”をいう歌があります。「あなたのそのままの姿で、来なさい。」という歌です。

牛や羊と異なるのは、肢体を部分に切り分けることができないということです。頭はひねります。そして、翼も引き裂きますが、引き離すことはしません。切り分けることが契約の印であり、各部分が主に捧げられることを強調するには不十分ですが、その現実の中にあっても主にささげることができる枠組みを主は備えてくださいます。

ところで、鳩を献げる人の話が新約聖書に出てきます。他でもない、イエスの両親ヨセフとマリヤです。「ルカ 2:22-24 そして、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子をエルサレムに連れて行った。それは、主の律法に「最初に胎を開く男子はみな、主のために聖別された者と呼ばれる」と書いてあるとおり、幼子を主に献げるためであった。また、主の律法に「山鳩一つがい、あるいは家鳩のひな二羽」と言われていることにしたがって、いけにえを献げるためであった。」とあります。レビ記 12 章に、出産後の女がいけにえを献げるのは羊と家鳩であるが、羊を飼う余裕のないときは二羽の家鳩をささげよ、とあります。主イエスは貧しい家庭にお生まれになりました。

コリント第二 8 章 9 節にこうあります。「8:9 あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」イエス様が貧しくなられたのは、私たちが霊的に豊かになるためでした。使徒パウロはこれを、惜しみなく献げ、分け与える恵みにおいて豊かになりなさいという勧めの中で書いています。豊かに分け与える者が富んだ者なのです。ですから、家鳩の全焼のいけにえには、貧しくなられたキリストのお姿があり、そして、どんなに事欠いているように見えても、自分が主に献げる中で豊かにされるのだということを教えています。

このように、じっくりと献げることについて見ていきました。これが、まずは聖められていることの証しであります。